2024 Autumn
NO.488

AAR News

特集：紛争下の人道支援
～戦火を逃れた人々のために～

AARから受け取った食料を運ぶ子どもたち＝スーダン東部カッサラ州の避難所で2024年7月10日

AAR ニュース 2024 秋号

p2-3 特集：紛争下の人道支援
p4-5 創立 45 周年特集ーカンボジア支援の 45 年を振り返る
p6 活動レポート：能登半島地震支援　緊急支援のお知らせ（ベトナム台風、パキスタン水害）
p7 活動レポート：ロヒンギャ難民支援　駐在員だより：ザンビア
p8-9 インタビュー：柴田 保弘さん（HARIO 株式会社会長）
p10-11 インフォメーション
p12 スタッフ紹介：ニエム・ダヴォット（AAR プノンペン事務所）

since 1979
45th
想いを、支援に。

AAR Japan
認定NPO法人 難民を助ける会

特集

紛争下の人道支援

～戦火を逃れた人々のために～

武力衝突の混乱が広がるスーダン、ロシアによる軍事侵攻が長期化するウクライナ、そして不安定な政情が続くアフガニスタン――。世界各地で人道危機が相次ぎ、多くの人々が家や仕事を失い、過酷な生活を強いられています。さまざまな困難と制約がある中、AARが現地職員とともに取り組む「紛争下」の人道支援活動を最前線から報告します。

01

スーダン 食料不足に苦しむ避難民支援

スーダンで2023年4月に発生した国軍と準軍事組織の武力衝突では、これまでに1万人以上が犠牲になり、1千万人以上が難民・国内避難民となっています。首都ハルツームの戦闘が地方に拡大し、深刻な食料不足に加えて、略奪や性暴力がまん延する状況に陥る中、AARは避難した人々に食料や衛生用品を配付する緊急支援を実施しています。

AARが活動する同国東部カッサラ州には、7月末時点で約24万人の国内避難民が避難し、その数は増加の一途をたどっています。AARは州政府の人道支援委員会などと調整しながら、避難してきた人々に小麦粉やコメ、調理用油などの食料パッケージと生活必需品を届けました。

2人の子どもの母親ノウラさん（33歳）は、首都ハルツームで暮らしていましたが、政府軍の軍人である夫はRSFの攻撃で重傷を負って入院し、戦闘が日に日に激化する中、母子3人で地方に避難することを決意しました。「何より夫のことが心配ですし、私たちの家と残してきた大切な物を思い出すと、とても悲しくなります。しかし、それらを犠牲にしてでも、私は子どもの安全を選びました」。AARから食料を受け取ると、「これでしばらくは食料の心配をせずにすみます。本当に助かりました」と少し安心した表情を見せました。

今後は現地に活動拠点を設けるとともに、イタリアのNGOと連携して、引き続きカッサラ州で避難民保護に取り組む計画です。

海外駐在員（スーダン事業担当）
相波 優太

AARが配付した洗濯用のタライ

ビニールシートで天井と壁を覆っただけの国内避難民の住まい

配付会場に集まる人々

02

ウクライナ
困窮する人々に生活費を提供

ロシアの軍事侵攻が続くウクライナでは、周辺国に逃れた難民に加え、約370万人の国内避難民が厳しい状況に置かれています。AARは現地協力団体とともに、同国南部ミコライウ、ヘルソン両州で、困窮する地域住民や避難民の生活を支える現金支給を行っています。支援対象は、住民や避難民の中でも、特に困難に直面する新たな避難者、戦闘地域の近くに留まらざるを得ない家族、高齢者や障がい者、複数の子どもがいる世帯などです。

3人の子どもの母親オレナさん（26歳）は開戦以来、比較的安全な地域で1年過ごした後、故郷ヘルソン州に戻りましたが、今年5月には大規模なドローン攻撃を経験しました。「建設業をしていた夫は戦争のせいで仕事を失い、生活は苦しいことばかり。いただいた生活費で子どもたちの衛生用品などを買いました。攻撃を受けて他所に避難するにもおカネが要るので、この支援は私たち家族の命を守ることにとても役立っています」。

ロシア軍に9カ月間占拠されていたヘルソン州の村で暮らす70代夫婦は、「心臓病などの持病を長年抱えていて、高額の薬が買えなくて困っていたところに支援が届きました。日本の皆さんに心から感謝します」と話しました。

オレナさんと3人の子どもたち

ロシア軍の攻撃で破壊されたブラホダトネ村の建物

キシナウ（モルドバ）事務所
シュクル・バイデラ

column

アフガニスタン
多くの制約を乗り越えて

長く政情不安が続いてきたアフガニスタンで、AARは2023年10月に西部ヘラート県で発生した大地震の被災者支援、隣国パキスタンからの帰還民を地雷・不発弾の危険から守る啓発活動などに取り組んでいます。しかし、治安の関係で日本人職員が入国できないうえ、イスラム原理主義勢力タリバンが復権した影響もあって、人道支援活動に多くの制約が課せられる中、現地職員と日々連絡を取って事業を継続しています。

女性がNGOで働けなくなったり、教育分野の事業ができなくなったり、事業地の変更を急に求められることもあります。それでも現地の活動を途切れさせないために、政権側が譲れないとする部分は尊重しつつ、事業の持続性が損なわれないように、そして支援から取り残される人々を新たに生まないように、臨機応変に対応することを心掛けています。

地雷回避講習を受ける子どもたち

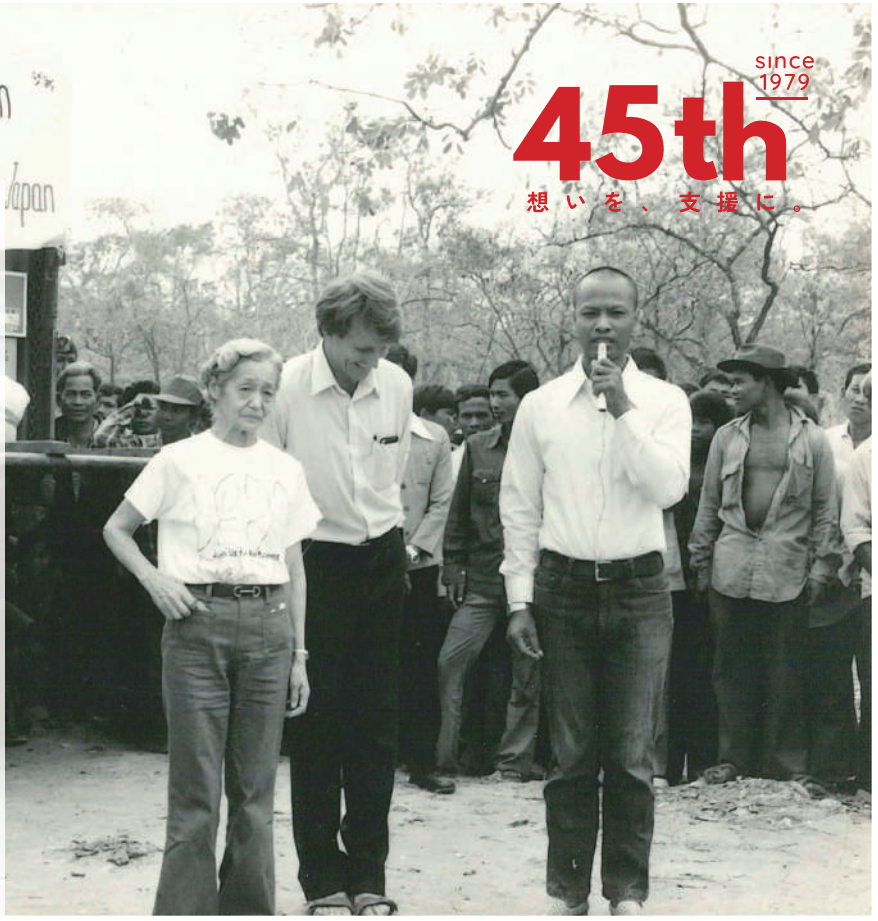
東京事務局　鶴岡 友美

※これらの活動は皆さまからのご寄付に加え、ジャパン・プラットフォームの助成を受けて実施しています。

since 1979
45th
想いを、支援に。

AARは2024年11月24日に創立45周年を迎えます。当会の前身は1979年に発足した「インドシナ難民を助ける会」。1970年代後半から80年代にかけて、ベトナム、ラオス、カンボジア（インドシナ三国）から、新たな社会体制下での抑圧を恐れた大勢の人々が海外に逃れました。日本にもベトナムから多くのボートピープルが漂着して大きな政治・社会問題になりました。

AARはそうしたインドシナ難民を市民の力で支援することを目的に、創設者の故相馬雪香の呼び掛けで日本初の民間の難民支援団体として誕生しました。今日の当会の活動基盤である「難民支援」「障がい者支援」「地雷対策」は、いずれもカンボジア難民支援を原点として現在に至るまで継承されています。



タイ・カンボジア国境の難民キャンプに衣類を届ける創設者の相馬雪香（左）＝1980年

創立45周年特集
カンボジア支援の45年を振り返る

国境の難民キャンプにボランティアを派遣

カンボジアでは1975～79年のポル・ポト政権時代、100万人とも200万人とも言われる人々が犠牲になり、社会や経済が壊滅状態に陥りました。AARは創立直後の1980～92年、タイ・カンボジア国境の難民キャンプにボランティアを派遣し、衣類や毛布、車いすなどの支援物資の配付、医療・給水支援などに取り組みました。当時70歳近かった相馬は自ら現地で先頭に立ちました。

難民キャンプには避難途中で地雷によって手脚を失った人々がたくさんいました。支援を続ける過程で、AARは最も困難な状況に置かれた障がいのある難民の支援に力を入れるようになりました。これが当会の障がい者支援および地雷被害者支援の始まりです。

プノンペンに事務所 地雷対策を本格始動

80年代後半から和平プロセスが進み、91年には国連主導で「パリ和平協定」が結ばれました。難民の帰還が始まったことに伴い、AARは92年にカンボジア外務省と協定を結んで、首都プノンペンに現地事務所を開設。学校建設や子どもたちへの文房具の提供（愛のポシェット運動）に取り組み、93年に障がい者支援センター、94年に車いす工房を開設しました。

同国では内戦時代に埋設された数百万個の対人地雷で、毎年多くの犠牲者が出ていました。紛争終結後も人々を苦しめる地雷の残酷さを目の当たりにし、AARは96年に地雷撤去キャンペーンを開始。英国の地雷除去団体ヘイロー・トラストと協力して、カンボジアの地雷除去活動に取り組みました（96～99年）。97年には「地雷禁止国際キャンペーン（ICBL）」に加盟し、国内外でのアドボカシー

地雷被害者などが働く車いす工房＝1995年

活動にも力を注ぎました。その後、当会の地雷対策事業はアフガニスタン、アンゴラ、スーダン、シリア、ウクライナなどに広がります。

「会の原点」とも言える来日したインドシナ難民の教育・就労支援、日本語教室などの取り組みは、姉妹団体である社会福祉法人「さぽうと21」に引き継がれ、在日外国人支援と併せて現在も継続しています。

地雷除去後、安全となった土地＝1999年、オッダーミエンチェイ州サムロン郡

障がいのある子どもたちへの支援

2000年代に入り、カンボジアにも障がい者が学ぶ職業訓練校や大学が生まれたことを受けて、職業訓練センターは2011年に活動を終了。AARは車いす工房の運営を支えながら、同国政府が進める障がい児教育支援の一環として、「インクルーシブ教育（IE）」推進事業を2013年から実施しています。地元の行政・教育機関と協力し、教員の能力強化研修、校舎のバリアフリー化、保護者や地域住民に対する啓発活動などに取り組んできました。

カンボジアは近年、目覚ましい経済成長を遂げていますが、障がいのある子どもたちには発展の恩恵が届いていません。45年にわたってカンボジアを支援してきたAARは、自分たちの原点を忘れず、この国の人々に寄り添う活動を続けてまいります。

Report from CAMBODIA 現場レポート

プレイチャ小学校の教室で最前列に座って授業を受ける弱視の兄弟

（左から）車いす工房のソバノーさん、オクサルーンさん、AARの大室和也

楽しく学校に通っているよ！

「先生も友だちも親切にしてくれるし、学校で一緒に勉強できるのは楽しい」と話すのは、クサイ・カンダール郡のプレチャイ小学校に通う兄弟（10歳、9歳）です。極度の弱視があり、黒板に最も近い最前列に座っています。クラス全員で黒板の文字を読み上げた後、先生は2人にもう一度大きな声で読み聞かせるなど、配慮をしながら授業を進めています。

AARが同郡でインクルーシブ教育の推進に取り組んで約10年。支援対象校は39校に拡大し、これらの学校で学ぶ障がい児は57人から184人に増えました。教員や行政関係者1,366人がAARの研修を受け、障がい児の通学支援も進んでいます。同郡の教育局次長は、「健常者の児童さえ小学校過程を修了できない状況にあって、障がい児の就学など近年までとても考えられなかった」と話しています。

今も地雷と戦い続ける人々

車いす工房は現地NGOとして独立し、現在はAARのサポートを受けながら車いすや歩行補助具を製造・販売するほか、貧困世帯の障がい者に月に2～3台を無償提供しています。

オクサルーンさん（写真中央）は内戦中、政府軍兵士だった28歳の時に地雷に触れ、右脚と左眼を失いました。「当時、身体障がい者は差別され、市場でも物乞いと間違われ悔しい思いをしました」と振り返ります。建設現場の手伝いなどで食いつないだ後、開設当初の車いす工房で働き始め、今では若手を指導するリーダー役として欠かせない存在です。「地雷被害者が苦しみ続けることのないよう、国際社会がこの問題にもっと注目し、地雷のない世界を目指してほしい」と訴えています。カンボジアでは2022～23年に死者14人、負傷者59人の地雷被害が報告され、除去団体による支援も続いています。

緊急支援

能登半島地震から9カ月
被災地の人々とともに

友人と協力して調理するレジナさん（中央）＝2024年7月21日

助け合える関係を築くために

AARでは、発災直後から外国人被災者への支援に注力してきました。被災地で暮らす技能実習生や外国籍の住民は、言葉の問題もあって地域とのつながりが薄く、震災時の行政サービスや避難所の情報が届きにくい状況にあります。近隣の方々に外国人居住者の存在を知ってもらい、平素から助け合える関係を築くきっかけになればと、地域で暮らすフィリピン人の皆さんによる炊き出しを実施しました。

7月に石川県輪島市で行った炊き出しに、同市内で日本語教室を運営する木下伸一さんの協力で、フィリピン人のレジナさんと友人たちが参加。AARと協働で炊き出しを続けてきた地元のシェフ、冨成寿明さんたちの衛生面での指導の下、鶏肉と野菜のトマト煮込み「アフリタード」を作り、避難所で生活する53人に提供しました。

レジナさんは「大量に作るので、友人に手伝ってもらいました。とても楽しかった」と笑顔で話します。料理はシェフらも絶賛の出来栄えで、「初めて食べたけど、ご飯にも合うし、おいしいね！」「フィリピンの人が作ってくれたんだって」と大好評でした。

AARは6団体と協働し、6月末までに約17万食の炊き出しを提供しました。

仮設住宅での交流を促す

また、AARは志賀町と中能登町の仮設住宅で入居者への家電の提供を行っており、これまでに433世帯を支援しました。現在は志賀町で交流支援[※1]にも取り組んでいます。

9月11日に、とぎ第2団地の集会所で、困りごとの相談やおしゃべりを楽しむサロン「やわやわ[※2]喫茶」を開催。AARの職員らがお茶菓子を提供し、13名が参加くださいました。「自宅は全壊ですが、住み慣れた家を取り壊すのは寂しい。仮設を出た後のことを悩んでます」「入居して半年。バラバラの地域から来たけど、今はこうしたイベントで話すのが楽しい」といった声も聞かれました。

発災から9カ月。仮設住宅への入居が進んでいますが、今後は災害関連死や孤立なども課題となります。被災された皆さんの声に耳を傾けながら、支援を続けてまいります。

仮設住宅の皆さんと話をするAAR東京事務局の櫻井祐樹（左）＝2024年9月11日

※1 この支援事業は皆さまからのご寄付に加え、ジャパン・プラットフォーム（JPF）の助成を受けて実施しています
※2 能登地方の方言で「ゆっくり」「ゆったり」という意味

ベトナム台風・パキスタン洪水被災者への緊急支援を開始

ベトナムでは、9月7日に上陸した大型台風11号により甚大な被害が出ています。AARは、9月14日より職員3名を現地へ派遣し、現金給付などの緊急支援を開始しています。また、パキスタンでは7月から続いた大雨により、各地で大規模な洪水が発生しています。9月12日より現地事務所職員が特に被害の大きかった北部のハイバル・パフトゥンハー州で調査を開始しています。緊急支援にご協力くださいますようお願い申し上げます。

○郵便振込・ゆうちょ銀行から
口座番号：00100-9-600（特定非営利活動法人難民を助ける会）
通信欄に「ベトナム台風」または「パキスタン洪水」とご記入ください
○クレジットカード、コンビニ払い、銀行振り込みはHPよりお手続きできます

ベトナム北部チュオンミー県イェンティン村で被災した女性に話を聞くAARの岡山靖典＝2024年9月15日

難民支援

バングラデシュへの大量流入から7年
忘れられたロヒンギャ難民の今

ミャンマー西部ラカイン州で2017年8月、イスラム少数民族ロヒンギャが国軍・治安部隊の武力弾圧を受けて、70万人余りがバングラデシュに流入してから7年。累計100万人超が祖国に帰還できる見込みもないまま、世界から忘れられつつあります。

遠のくミャンマーへの帰還

「キャンプの治安は年々悪くなり、援助団体の支援も減っています。子どもたちは正規の教育や職業訓練は受けられません。ここに閉じ込められたまま、子どもたちの人生を台無しにしたくはありません」。

クトゥパロン難民キャンプで暮らすアフメドさんと子どもたち＝2024年7月末

7年前からコックスバザール県の難民キャンプで暮らすアフメドさん（32歳）。7人の幼い子どもを抱え、妻は弾圧の際に右目を失明しました。一家は今もミャンマーに帰りたいと願っていますが、同国は2021年の軍事クーデター以降、事実上の内戦状態に陥り、帰還の見込みはありません。

バングラデシュでは難民に対する住民感情が悪化しており、一日も早い送還を目指す政府の立場も変わりません。ベンガル湾のバシャンチャール島に造成された10万人規模の収容施設への難民移送も進められています。一部の難民が絶望感からインドネシアへの密航を試み、密航船が沈没して多数が死亡する惨事も起きています。

AARはスイスのNGOと連携し、当会が建設した建物を女性や子どもを支援する多目的施設として活用。子育て支援、性暴力被害者のケア、メンタルヘルス支援などを続けています。

駐在員だより

不便で楽しいメヘバ生活@ザンビア

ソーラーパネルの大掃除

みなさん、こんにちは。今年8月にケニアのカクマ事務所から、ザンビアの北西部メヘバ難民居住地にあるメヘバ事務所に異動しました。AAR海外事務所の中でも特に僻地と言われるメヘバまでは、日本から飛行機を3本乗り継ぎ、さらに悪路を車で2時間。ようやくたどり着いたこの地での生活を紹介します。

私の住む事務所兼住居には電気も水道も通っていません。電気はソーラーパネルと発電機で賄っています。土埃でパネルが汚れると、スタッフが屋根に上って大掃除！　これも日常の一部です。水は井戸から汲んでバケツにためて使っています。水汲みは現地スタッフが担当してくれますが、なかなかの重労働なので、水の使い過ぎには要注意です。お風呂はタライで水浴び！　少し寒い夜はお湯を沸かして、ぬるま湯にして疲れを癒しています。

そして、一番気になっていたのは食べること。大好物のストリートフード「チャパティ＆エッグ」を発見して大喜びしています。厚めのナンに卵やキャベツを巻いて、これが本当に美味しいんです。しかも80円でお腹いっぱい。ケニアでもよく食べていました。市場で5円くらいで買えるさつまいものフライ、小さな揚げパン「フリッター」、現地産の美味しい「メヘバ米」もお気に入りになりました。

ケニアでもよく食べていた「チャパティ＆エッグ」

事務所を一歩出ると、ニワトリやヤギ、ブタがそこかしこに。不便さもありますが、自然に囲まれた生活を堪能しながら、現地スタッフと毎日頑張っています。

メヘバ事務所　小林 鮎実

HARIO 会長
柴田保弘さん

ガラス製造技術と社会貢献を大切に

耐熱ガラスの世界的なメーカー、HARIO株式会社（本社・東京都）は、工業用製品からコーヒードリッパーや水出し茶用ボトルなどの家庭用品、アクセサリーまで幅広く手掛けています。環境保護や社会貢献にも取り組み、AARのチャリティ商品開発にもご協力いただいています。同社の柴田保弘会長にその歩みと製品にかける思いを伺いました。

（聞き手・東京事務局 太田阿利佐）

国内で唯一の耐熱ガラスメーカー

―創業百年を超える歴史をお持ちです。

1921年に「柴田ハリオ硝子」として父が創業し、当初はビーカーなど理化学用のガラス器具を作っていました。ガラスには、一般的な「ソーダガラス」、衝撃に強い「強化ガラス」などがありますが、父が選んだのは「耐熱ガラス」。1995年に私が社長に就任した時、日本には耐熱ガラスメーカーが8社ありました。今、日本に工場を持っているのは当社だけです。

ガラス工場はかつて、ガラスを溶かすために石油や重油を燃やし、大量の煙を出していました。これではいけないと、当社は1972年にガラスに電気を通して溶かす日本初の「直接通電式ガラス溶融炉」を開発。煙突のないガラス工場を実現したのです。この炉を導入したのが古河工場（茨城県）です。日本で生き残った決め手はこの無公害化、環境への配慮だと考えています。

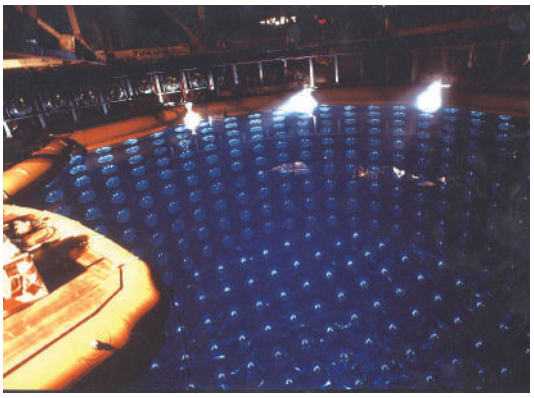
―HARIOという社名はどこから？

「玻璃（はり）」は水晶や透明なガラスを指す言葉。かつては「玻璃の王様」という意味を込めて、ハリオと社名に入れていました。私は米国の貿易会社に勤めてから当社に入り、すぐ海外展開を命じられ、ハンガリー、インドネシア、台湾、韓国、中国で工場建設に取り組みました。これからの時代、世界に通用しなければ企業に将来はありません。だから2012年に「HARIO」にしました。

カミオカンデに貢献

―優れた技術力で、素粒子観測装置「カミオカンデ」（岐阜県飛騨市）に大変貢献されたそうですね。大きな電球のような装置に御社のガラスが使われています。

カミオカンデは1987年、稼働開始後わずか1カ月でニュートリノを世界で初めて観測し、故・小柴昌俊先生のノーベル賞受賞につながりました。開発が始まった1979年当時、ニュートリノを検出するのに使われる光電子増倍管は直径が5インチ（12・7センチ）のものしかありませんでした。しかし、カミオカンデ用は20インチ（50・8センチ）が必要。厚さ4ミリで均質にガラスを吹き、全く同じ大きさのものを千個以上そろえるのは、まさに至難の業でした。



カミオカンデの内部＝東京大学宇宙線研究所神岡宇宙素粒子研究施設提供

世界にひとつだけのガラスのバイオリン

―すばらしいですね。会長はその手吹きガラスの技術継承に力を注いできたとか。

社長になって、改めて工場でその仕事を見て、この技術を捨ててはならんと思いました。でも職人のなり手がいないんですよ。とにかく熱いし、大変ですから。

そこでバイオリニストの川井郁子さ

んの協力を得て、技術の継承、向上を目指し、ガラスのバイオリン作りに挑戦しました。美しい音を出すには、ガラスを均一の厚さにする必要があり、何十回と試作し、世界でたったひとつのガラスのバイオリンが完成しました。

その後、チェロや琴、ギターも製作しました。若い人も音楽なら聴くし、そこからガラスに関心を持ってもらえればと。今はレジェンドと呼ばれる2人の職人が、女性も含め若手を育てています。本当に新しい、先進的な製品は機械では作り出せない。手吹きガラスの技術を残してよかったと思っています。技術を捨ててはいけません。

能登半島の復興にも協力

―経営者として苦しい時もあったのでは。

大変だったのは東日本大震災です。停電で、古河工場のガラス炉に電気が来なくなってしまいました。電気が止まれば、ガラスは固まり、炉もお終いです。自家発電では2台あった炉のうち1台にしか電気を供給できず、どちらかをあきらめる必要がありました。辛かったですね。

停止した炉にはガラスの大きな塊が残されました。これを捨てるわけにはいかないと、砕いてアクセサリーを作ることにしました。今や「HARIOランプワークファクトリー」として全国10カ所に直営店を持つまでに成長しました。

福島県南相馬市の小高区にも「ランプワークファクトリー」を設けました。小高区は東京電力福島第一原子力発電所事故で、5年以上も全域に避難命令が出ていました。命令解除後、若い人、特に女性が生き生きと働ける職場を作りたいという要望に応じ、バーナーなど専門用具を提供し、技術者を派遣して、指導にあたりました。今ではアクセサリー工房として独立されています。

そうしたら今度は、1月の能登半島地震の被災者の方々から「ぜひ能登でも」とのご要望をいただきました。よし、もう一回やろうと。秋には金沢で職人の研修を始め、珠洲にも「ランプワークファクトリー」を作ります。

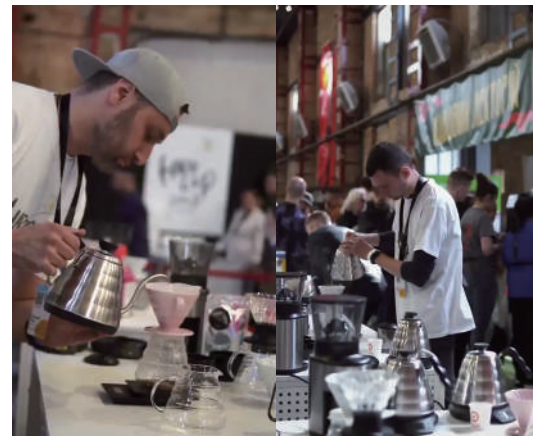
―ごく自然に社会貢献をしておられます。

私が社長の時、フィランソロピー委員会とSDGs委員会を作りました。「1day/365（365分のワンデイ）」というプログラムでは、1年のうち1日は、地域の清掃でもなんでもいいのでボランティア活動に参加しようと社員に呼びかけています。社員のほとんどが参加してくれています。社員が給与の千円未満の端数を寄付したら、会社もその同額を寄付する仕組みも作っています。

戦火のウクライナでコーヒーイベント

―AARにも熊本地震以来、ご寄付などの応援をいただいています。またHARIOの大人気商品「フィルターインボトル」※をチャリティ商品として販売させていただいています。ラベルの花の絵は、ウクライナ難民の子どもたちが描きました。

当社は昨年5月、ウクライナの首都キーウで、バリスタのコンテスト「HARIO CUP 2023」を開催し、皆さんに本格的なコーヒーを味わっていただきました。「HARIO CUP」は2022年に創業百周年を記念して始めました。欧州支社が、戦時下にあるウクライナの方々に、コーヒーを通してひと時でも日常を取り戻してもらおう、ウクライナのバリスタたちを支援しようと企画しました。



ウクライナの首都キーウで2023年5月に開催された「HARIO CUP」

当社の製品には、V60という世界中で使われているコーヒードリッパーや、私がハンガリーで仕事をしている時分に手掛け、ロングセラーになっている「ティーポット・ドナウ」などがあります。コーヒーやお茶は、人の心を通わせるんですね。今年は新商品として組立式のコーヒードリッパー「SUIREN」を発売しました。コーヒーを飲むひと時をより楽しんでいただけると思っています。

―社会貢献へのモチベーションはどこから。

困っているところには支援をする。ただそれだけの話です。AARさんだって同じじゃないですか。しかもAARさんはアジアやアフリカ、ウクライナなど海外の困っている地域に職員が直接行って活動されている。すごいなと思います。ぜひ今後も協力させていただきたいと思っています。

新製品「SUIREN」（右）と、フィルターインボトル

※ボトルはAARのチャリティショップでご購入いただけます

遺贈・相続財産寄付を お寄せいただきました

渡邊　創さま（東京都）

（2024 年 5 月 16 日～ 8 月 15 日）

皆さまの思いを大切に受け止めて、難民や子どもたち、障がいのある方々のために役立ててまいります。

チャリティチョコレート受付開始

北海道の株式会社六花亭とコラボしたAARのチャリティチョコレート。「気軽にできる国際協力の方法として長年愛されています。昨シーズンは2万1,624個を販売し、純益はすべてAARの支援活動に役立てています。

今シーズンは、10月1日より受付、11月上旬より発送を開始します。同封のチラシやチャリティショップよりご予約を承ります。ご注文を心よりお待ちしております。

手のひらサイズの板チョコが4枚入り。
1箱：800円（税込）（仕入れ価格の高騰により値上げしました）

ご予約は
こちらから

AAR 創立 45 周年記念シンポジウム「長期化する人道危機への挑戦」（仮）

11月に創立45周年を迎えるにあたり、私たちはより良き支援に向けた決意を新たにしています。近年、ウクライナ危機やスーダン内戦、大規模な自然災害が相次ぎ、これらは、地雷問題や食糧危機、政変による支援の停滞など、深刻かつ複雑な課題を生み出しています。

シンポジウムでは、長期化する人道危機の現状を伝えるとともに、「紛争解決請負人」として知られる伊勢崎賢治東京外国語大学名誉教授、国際機関での豊富な経験を持つ忍足謙朗元国連WFPアジア地域局長をお迎えし、現場で活動する国際NGOに今、何が求められているのかを共に考えます。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

【日時】2024年11月10日（日）14：00～15：45（予定）
【場所】御茶ノ水ソラシティカンファレンス
（東京都千代田区、JR「御茶ノ水駅」1分）
【参加費】無料・要予約（HPまはたお電話で）

2024 年夏募金 ご協力ありがとうございました

6月にお送りした夏募金のお願いに、のべ1,776人の皆さまより1,948万4,922円のご寄付をいただきました。温かいご支援に心より御礼申し上げます。過酷な状況に置かれた難民・避難民が支援から取り残されることのないよう、引き続き支援を続けてまいります。

支援物資を受け取るスーダンの国内避難民の親子

まるごとプロジェクト募金 2024 御礼 & プロジェクト追加のご案内

AARが世界各地で実施する活動の資金を一括でご支援いただく「まるごとプロジェクト募金2024」に対し、春に募集したすべてのプロジェクトにご寄付をお寄せいただきました。ご協力に心より御礼申し上げます。世界情勢が一層混迷を深める中、アジアやアフリカへの国際社会からの支援は著しく減少しています。AARの活動地から届いた支援を求める声に応えるために、今秋、2つのプロジェクトを追加します。詳しい支援内容は同封のチラシをご覧ください。お電話でもご説明いたしますので、お気軽にお問い合わせください。

募集中のプロジェクト

【スーダン】
地雷や感染症で手足を失った方に義手義足を提供
150万円×1口

【タジキスタン】
障がい児を育てる母親たちに縫製研修とミシン提供
115万円×1口

お問い合わせ

AAR 東京事務局　園城（おんじょう）、桐生（きりゅう）
TEL：03-5423-4511
E-mail：info@aarjapan.gr.jp

自治体クラウドファンディング活用

佐賀市内で防災講座を開催

防災手帳について説明するAAR堀尾麗華

AAR佐賀事務所は昨年、「ふるさと納税制度」を活用したガバメントクラウドファンディング®（GCF®）で防災プロジェクト「来る前に備える 真の防災能力アップ！」を立ち上げ、集まったご寄付によって今年6月、佐賀市内で水害の防災講座を実施しました。

防災講座はＡＡＲ東京事務局の堀尾麗華が講師になり、6月14日に障がい者の就労支援に取り組む「ライフデザイン」（佐賀市）で「自分でつくる安心防災手帳」を使ったワークショップを開催。23人の参加者にハザードマップの読み方を説明した後、周辺で危険とされる場所を一緒に確認したほか、非常時の携帯トイレや段ボールトイレの使い方を伝えました。「ライフデザイン」に携帯トイレ（100個入り）を1箱、各参加者には携帯トイレを1個ずつ提供しました。

完成した段ボールベッドを試す子どもたち

子ども支援のNPO法人「居場所そら」（同市）で15日に開催した講座では、参加した子どもと保護者22人全員が避難所に避難した想定で、「体調不良のおばあちゃんが横になって休める段ボールベッドを、段ボール25枚を活用して作ってみよう」という課題に挑戦しました。強度を高めるにはどうすれば良いか試行錯誤しながら、複数の子どもが乗っても壊れないベッドを完成させ、段ボールやゴミ袋、新聞紙を材料にした段ボールトイレの作り方と使用方法も体験しました。昼食には非常食のアルファ化米ご飯と湯せん調理のハンバーグ、お惣菜を試食。初めて食べる子どもたちばかりでしたが、「おいしい！」と好評で、保護者からも「子どもたちが喜んで食べられることが確認できた」「7人家族で食べる量の目安が分かった」などの感想をいただきました。

災害が起きないことを祈りつつ、今回の学びが万一の際に役に立つことを願うとともに、クラウドファンディングにご協力いただいた皆さまに御礼申し上げます。

防災の秋

10/19・20「ぼうさいこくたい 2024」のステージ発表に登壇します

ワークショップや展示を通して防災について考え、行動する内閣府主催の防災イベントに AAR が登壇します。AAR のステージ発表では、防災を自分事としてとらえることの大切さについてお話します。皆さんのご来場をお待ちしています。

- ぼうさいこくたい 2024 in 熊本 -

【日時】2024 年 10 月 19 日（土）10：00 ～ 18：00（予定）
10 月 20 日（日）10：00 ～ 15：30（予定）
（AAR ステージ発表は 20 日 11:40~12:00 頃）

【場所】熊本城ホール、熊本市国際交流会館、花畑広場
（AAR の発表会場は熊本市国際交流会館 4 階 第 2 会議室）

【参加費】 無料（一部オンラインでも配信予定）

ぼうさいこくたい 2024 in 熊本

詳細は、「ぼうさいこくたい 2024」の WEB サイトでご覧いただけます

障がい児の就学を支える仕事にやりがいを感じます

AARプノンペン事務所
ニエム・ダヴォット

AARがカンボジアで取り組む障がい児就学支援（インクルーシブ教育）事業を担当するニエムさん。自身も身体障がい者として、障がい児を支え続ける思いを聞きました。

―単刀直入に。どうして右腕を失ったのですか。

首都プノンペン近郊のカンダール州にある故郷の村は、内戦時代の激戦地で地雷・不発弾がたくさんありました。小学校2年生の時、友だち4人が拾った不発弾で遊んでいて、ちょうど私が通りかかった瞬間に爆発したのです。ひとりが亡くなり、私は右腕を失いました。今も体内に金属片が残っています。

― 大変な思いをしたでしょうね。

1年休学して小学校に戻ったのですが、先生から「障がい者が勉強しても仕事には就けない。学校を辞めたほうがいい」と言われて、とても傷付きました。まだそんな時代だったのです。でも、両親はいつも私を応援してくれて、大学まで卒業させてくれました。

本当は教師になりたかったので、英語塾を開いて近所の子どもたちに教えて生計を立てたり、地元の障がい者団体で会長を務めたりした後、AARの障がい者支援事業を知って入職しました。

― AARで取り組んでいる仕事は。

障がいのある子どもたちが普通に小学校に通い、他の子どもたちと一緒に学べる環境づくりをしています。障がい児教育についての教職員や行政関係者の研修、学校施設のバリアフリー化、家族や地域住民の理解促進などを進めています。

私自身、障がいを乗り越えてやって来られたのは、教育のおかげです。教育の大切さを誰より知る者として、障がい児が教育を受ける機会を得られるように精一杯サポートしています。とてもやりがいを感じますね。

― 仕事以外の時間はどうしていますか。

なかなか休む暇がないのですが、3人の娘たちに家で勉強を教えるのが一番好きです。自宅の庭で野菜を栽培し、ニワトリやアヒル、淡水魚を飼っているので、自家製の食材を料理して家族で食卓を囲む時は心から安らぎを感じます。障がい者に対して偏見を持たず、いつも明るく支えてくれる妻にも感謝しています。

家族と過ごす時間を大切にするニエムさん

編集部より

世界の人道危機の現場で私たちにできることは限られています。それは「大海の一滴」に過ぎないかもしれません。しかし、その一滴を待つ人々、涙ぐんで感謝してくれる人々がいるのも事実です。日本の皆さんと現地の人々をつなぐために、AARは日々活動しています。

AAR News
2024 Autumn NO.488
次号は2025年1月上旬にお届け予定です。

特定非営利活動法人 難民を助ける会
〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-12-2 ミズホビル7F
Tel.03-5423-4511 Fax.03-5423-4450
www.aarjapan.gr.jp
AAR Japan